

# 隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第62回

森の彫刻家 上床利秋

## 寅年誌上新春干支展



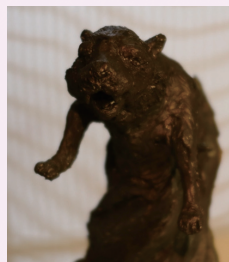
勝野 眞言



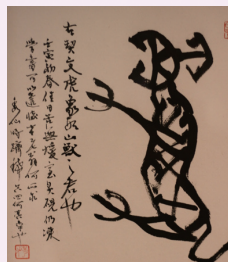
楠元 香代子



田中 厚好



美坂 康太郎



松清 秀仙



石橋 義弘



丸田 多賀美



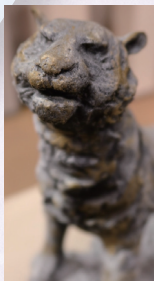
切原 隼人



原田 裕明



野添 浩一



野間口 泉

今年の干支は虎であるが、それを造ってみるという企画のお誘いを受けたのは昨年十月末の事だった。今回の出品依頼は中村先生が歳男という意味もあるというのだからお断りする理由など彫刻を学ぶ教え子たちにあるはずがない。きつと暮れは出品者二十数名が干支の寅づくりで、バタバタと大忙しの日々を過ごしていた。もうなと思う事だった。まるで大学教授が宿題を出し、それに応えるべく学生達が制作して提出しているように思えてどこ



前田 真里

に八十代から五十代までで、孫弟子まで入れると四十代で歳の差は離れている。それは先生作の干支寅を「師匠」として弟子寅たちが囲む姿でもある。



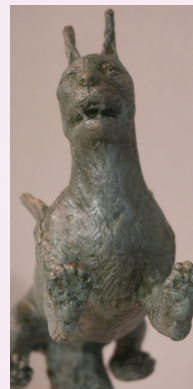
中村 晋也(3点)

か楽しく懐かしく思えた。教え子といつてももうず



トラはすでにもはやトラではない。私などやはりトラは小説山月記の印象が強い。皆それぞれの思いでトラを立体表現しており楽しい会場になっていた。一般の

ところでそのトラというお題だが、本物の野生のトラと日本人は誰も出くわしたはずがない。動物園の折の中の三食昼寝付きの



池川 直



清島 浩徳

美術愛好家が鑑賞されてもとても面白く興味深い内容である。

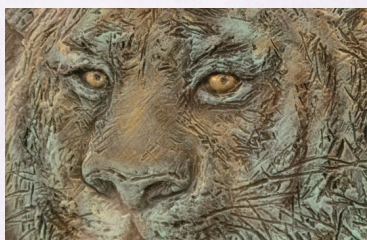
制作において小品サイズの干支の寅を造るとき、ネコ科の動物はその区別をつけてつくり分けするのは大変難しい。虎と雌ライオンをどう表現するべきなのだろう。子供トラと、猫の違いについてはどうだろう。それぞれの作家たちが同じ疑問を持ち、それぞれ観察し、考証し、表現するいい機会を与えていただいた。

◆月曜休館  
099)246-17070  
出品者敬称略  
撮影・石崎義弘・丸田多賀美

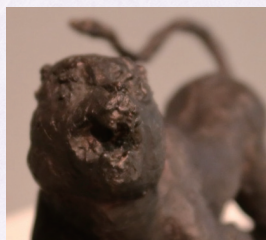
◆月曜休館  
099)246-17070  
出品者敬称略  
撮影・石崎義弘・丸田多賀美



上床 利秋



緒方 信行



立山 美次



井上 周一郎



脇園 奈津江